

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370017

研究課題名(和文) 空の論理の再解釈：分析アジア哲学の東アジアネットワークの構築

研究課題名(英文) Re-interpretating the Logic of Emptiness: toward an East Asian network of Analytic Asian Philosophy

研究代表者

出口 康夫 (Deguchi, Yasuo)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：20314073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代哲学の新分野である「分析アジア哲学」研究の一環として、大乘仏教の「空」の思想の論理的・概念的な内実、即ち「空の論理」を、現代の非古典論理を用いて再解釈することで、空の思想そのものを、現代的水準に照らしても十分に合理的・論理的な哲学的立場として再生させることを目指した。具体的には、中国三論思想の「中」「仮」概念と、後期西田哲学の「絶対矛盾的自己同一」概念に着目し、それらが三値のパラconsistent論理の枠内で再構築できることを示した。また分析アジア哲学研究の国際ネットワークの構築にも取り組んだ。

研究成果の概要(英文)：The logic of emptiness is the conceptual and logical structure of philosophy of emptiness of Mahayana Buddhism. This research project aimed to reformulate the logic of emptiness in terms of contemporary non-classical logic so as to revive the philosophy of emptiness as a cogent and viable theoretical option for the contemporary philosophical debates. In particular, concepts such as 'middle' and 'provision' of Sanlun school of Chinese Buddhism and absolutely contradictory self-identity of the later Nishida are analyzed and reconstructed in the light of a three valued paraconsistent system. As one of the pioneering attempts of Analytic Asian Philosophy, a new field of contemporary philosophy, this project also tried to construct its international research network.

研究分野：哲学

キーワード：空の思想 空の論理 非古典論理 分析アジア哲学

### 1. 研究開始当初の背景

東アジア思想全般に大きな影響を及ぼした大乘仏教の空の哲学、なかんずくその概念的・論理的な内実をなす空の論理については、それが現代の古典的な論理の枠組みからはみ出すものであることが、しばしば指摘されてきた。しかし空の思想ないし空の論理に関する従来の国内外の研究においては、それらを現代の非古典論理を用いて再解釈ないし再構築するというアプローチは全く採用されず、古典論理のみを唯一正しい論理だと見なした上で、空の論理を「非合理」「不可解」と切っ捨てて論調すら見られた。

一方、21世紀初頭、現代論理学における非古典論理研究の進展と蓄積を背景として、東アジアの空の思想の理論的背景の一つであるインドの仏教思想を、非古典論理の観点から解釈する研究が、グレアム・プリーストとジェイ・ガーフィールドによって始められた。本研究の研究代表者は、2004年から両者との共同研究を開始し、同様の手法を用いて、東アジアの仏教思想である華嚴思想に見られる「即の思想」ないしは「即の論理」の非古典論理的分析を行なった。この「即の論理」の非古典論理的分析の過程において、東アジアにおける「即」概念の間には、矛盾対立する概念同士を結ぶ「概念即」と、別個に存在する個物同士を融合させる「個物即」という、二種類の区別が可能であることが判明した。そこで研究代表者は、前者、即ち「概念即」を巡る論理構造を「空の論理」と名付け、それに対する非古典論理的分析を志向するにいたったのである。

また研究代表者は、非古典論理などの現代論理学や分析哲学の概念的道具立てを用いてアジア思想を再解釈する研究動向を「分析アジア哲学」と名づけたが、このような研究を行なっている研究者は、世界的に見ても、まだ数少なく、その研究ネットワークも十分に整備されていないのが現状であった。

### 2. 研究の目的

- (1) 東アジアの空の論理を現代の非古典論理を用いて再構築することで、それが、現代的水準に照らしても、十分に合理的で論理的な構造を持っていることを示す。
- (2) また、その空の論理が、適切な論理的枠組みの下で、科学等で用いられている通常の論理と両立可能であることを示す。
- (3) そのことで、空の論理を概念構造とする空の思想そのものも、科学的世界観とも両立可能で、理にかなった哲学的立場であることを明らかにする。
- (4) 一方、東アジアの伝統的な空の論理が非古典論理を用いて再構成可能であることを示すことで、非古典論理そのものの哲学的論理としての有効性を実証する。
- (5) また非古典論理的分析の結果、空の思想が、真なる矛盾を許す哲学的立場である「真矛盾主義」として再構成できることを示すことで、真矛盾主義の新たな理論的可能性を拓く。
- (6) 新分野である分析アジア哲学の国際的な研究ネットワークを、特に東アジア諸国を中心として構築する。

### 3. 研究の方法

- (1) 空の思想ないし空の論理が展開されている東アジア思想のテキストの読解と分析。
- (2) 上記テキスト分析で得られた結果を、現代の非古典論理を動員することで論理的に再構成する。その際、必要に応じて非古典論理の体系をテイラーメード的に構築する。
- (3) 東アジアを中心とした各国の研究者との共同討議を通じて、分析アジア哲学研究の有望性を国際的に認知させ、

共同研究にむけた研究ネットワークを構築する。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究では、空の思想や論理を体現している東アジアの思想として、中国の古典的な仏教思想の一つである「三論思想」と、後期西田哲学を取り上げ、それぞれが抱える論理構造を、非古典論理の観点から再構築することを目指した。

①三論思想としては、吉蔵(549-623)に連なる思想系譜を取り上げ、中でも『大乘玄論』に焦点を当ることで、そのテキストで語られている空の思想 / 論理のテキスト分析を行った。その際、同書に登場する三論思想のキーワード「中」や「仮」の概念内容の分析を行うとともに、同書に見られる「矛盾」表現を収集・吟味し、それが真なる矛盾として扱われているかどうかを検討した。

その結果、同書における上記「中」「仮」概念が、二項対立の超克を目指す超二項対立的思想を現すキーワードの役割を果たしていることを確認し、また同様に、同書における矛盾表現に対しても、矛盾対立する両概念いずれもが「真」と見なされることで、結果として、「真なる矛盾」という位置づけが与えられていることを見定めた。

このようなテキスト分析を踏まえ、同テキストにおける空の論理を再構成する枠組みとして、矛盾を論理的に無害化するパラコンシスタント論理のうち、古典的な二つの真理に加え、(否定によって値が変わらない)否定不動点真理値を有する三値の体系であり、そのうち二つを是値とするLPに着目した。LPでは、否定不動点真理値は是値の一つとされ、「(ともに古典的な意味で)真かつ偽」と解釈されていたが、本研究では、それを、「超二項対立的真」と解釈し直し、古典的な「二項対立的な真」と対置させた。結果として、LPとは異なり、本研究が用いる体系(これをLP\*と表記する)では、否定不動点是値によ

って表現される「超二項対立的真」と、古典的な是値によって表される「二項対立的真」という二種類の真理が登場することとなる。その上で、ある命題が超二項対立的な是値真理値を持てば、その命題とその否定命題がともに真となることで、ある命題とその否定命題のどちらか一方のみを主張し、他方を退けるという二項対立的選択が回避されることになるのである。

このようなLP\*を枠組みとして、『大乘玄論』を含む吉蔵系の三論思想の空の論理を再構築することで、その論理が、二項対立を超克するという思想的モチベーションに貫かれた、極めて首尾一貫した体系であることを示すことができた。そのことで、その論理を骨格とする三論思想自体も、現代論理的には否定不動点性によって表現できる「超二項対立」を軸とする空の思想として、合理的に再構成されたのである。

真なる矛盾を認める現代哲学の一立場である真矛盾主義では、従来、一貫して、真なる矛盾に対して「真かつ偽」なる命題という解釈が与えられてきた。これに対して、本研究は、三論思想の再解釈を通じて、「超二項対立的真」という、真なる矛盾に対する新たな解釈を与えることに成功した。結果として、真なる矛盾の解釈を多様化させることで、真矛盾主義じたいの哲学的可能性を拓けることになったのである。

②西田幾多郎の後期思想のキーワードの一つが「絶対矛盾的自己同一」である。これは、西田のタームの中でも、明示的に真なる矛盾について語っている概念として論議を呼んできた。一方で、この概念を(例えば「夫」と「妻」の間の関係のように)概念間の単なる相補関係を表すものとして解釈することで、それを古典論理の枠内で再構成しようとする試みもなされた。それに対して本研究では、矛盾を論理的に無害化する非古典論理の体系であるパラコンシスタント論理を用い

て、「絶対矛盾的自己同一」を、その字義通りに、真なる矛盾を認める概念として解釈することを目指した。

まず西田の後期テキストを読解することで、その哲学上のモチベーションの一つが(三論思想と同様)二項対立の超克にあることを読み取った上で、その超二項対立が、「二項対立的な性質を有した互いに別個の個物(a, b)が、第三者の個物(c)と同一となることで、その第三者において二項対立が乗り越えられる」という事態として表現されているとの解釈を得た。(下図参照)

$$\begin{array}{ccc} & c & \\ // & & \\ a & \neq & b \end{array}$$

このような「二項対立の乗り越え」を論理的に表現するため、本研究では、上記のLP\*に加え、「非推移的な同一性」「非推移的な(同一性に関する)ライブニッツ則」等の非古典的な道具立てを導入し、「絶対矛盾的自己同一」の非古典論理的再構築を試みた。この再構築においては、後期西田が、単に(超二項対立的に真と解釈された)真なる矛盾を認めるのみならず、全ての矛盾(従って、全ての命題)を真だとする「トリビアリズム」という立場にコミットしていたという解釈が得られた。

上述のトリビアリズムは、通常、例えば「 $1 + 1 = 3$ 」や「太陽が地球の周りを回っている」といった明らかに偽なる命題を、無差別に「真」と見なす立場として批判されてきた。このような批判を回避するため、本研究では、特殊な「トゥルースメーカー意味論」を導入した上で、「ある命題を真にする特定の实在」を意味する「トゥルースメーカー」に、全ての矛盾(従って、全ての命題)を無差別に真

とする「トリビアライザー」と、特定の命題のみを真とする「ノン・トリビアライザー」の区別を設定した。このような区別を導入することで、「全ての命題が無差別に真となる」というトリビアルな事態(トリビアリティ)は、实在の一部にすぎない「トリビアライザー」のみで起こっており、实在のそれ以外の部分(「ノン・トリビアライザー」)では生じていないという、トリビアリティの局所化(コンパートメンタライゼーション)が実現したのである。

以上の論理的な装置を動員することで、後期西田の立場は、いまや、無制限のトリビアリズムではなく、局所化されたトリビアリズムとして解釈されることとなり、例の「絶対矛盾的自己同一」は、「トリビアライザー」ないしは、そこで起こっている局所的なトリビアリティと見なされることになった。このような解釈によって、後期西田の「絶対矛盾的自己同一」概念が、真なる矛盾にコミットしつつも、頑健で理にかなった一定の論理的枠組みの中で再構成しうることが示されたのである。

またこのような後期西田解釈は、「局所化されたトリビアリズム」という、トリビアリズムの更なるバージョンを提案することで、トリビアリズムに関わる現代哲学の議論に新たな可能性を拓くことにも貢献した。

③そうじて、本研究では、東アジアの空の思想の基本的性格の一つが「超二項対立性」にあると見なされ、その「超二項対立性」が、「否定不動点是値」や「局所的トリビアリティ」といった現代の論理的ツールや概念によって十分合理的かつ説得的な仕方で表現可能であることが示された。結果として本研究プロジェクトは、分析アジア哲学の方法論の有効性と有望性を国内外に示すと同時に、その研究対象を東アジア思想に拡げる、一つの橋頭堡の役割を果たすことになった。

(2) 分析アジア哲学の国際研究ネットワーク構築に関しては、当初の予定であった東アジアを超えて、東南アジアや南アジア、さらには北米や欧州まで含めた、広範囲にわたるネットワークの成果が得られた。本研究プロジェクトに関わる海外での発表は10カ国、20回におよぶ(台湾(国立政治大学・国立陽明大学・華梵大学・東呉大学・科技部人文社会科学研究中心)・中国(北京外国語大学)・韓国(延世大学)・オーストラリア(メルボルン大学)・シンガポール(シンガポール国立大学)・タイ(シーナカリンウィロート大学・マハーチュラロンコーンラージャヴィドゥワラヤ大学)・インド(ジャダプール大学, ラビンドラ・バラティ大学)・イギリス(オックスフォード大学)・ドイツ(ヒルデスハイム大学))。これらの講演先では、それぞれの講演テーマに関する議論のみならず、分析アジア哲学という新分野全般についての意見交換が行われ、研究ネットワークを構築する継続的な取り組みが具体化したケースも複数ある。例えば、現在、国立政治大学(台湾)、シンガポール国立大学、研究代表者の所属大学(京都大学)との間で、定期的な学術会議の開催が継続中であり、また東呉大学(台湾)の研究グループとの学術交流も継続中である。さらに台湾の研究グループが、分析アジア哲学の国際共同研究を行なうため、研究代表者の下に若手研究者を派遣するプロジェクトを企画している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6件)

- (1) Yasuo Deguchi, Is Pseudo Jízāng a Dialetheist? Contradictions in Sānlùn School, 2014, 第四回日中哲学フォーラム「日中の哲学者がともに考える-哲学の原理的あり方と現代社会における役割」会議記録, 中国社会科学院哲

学研究所, 日本哲学会, pp. 69-83.

- (2) Yasuo Deguchi, Jay Garfield, and Graham Priest, How We Think Madhyamikas Thinks: A Response to Tom Tillemans, 2013 (H. 25), Philosophy East and West, 63-3, July, 426-35.
- (3) Yasuo Deguchi, Jay Garfield, and Graham Priest, Those Concepts Proliferate Everywhere: A Response to Constance Kassor, 2013, Philosophy East and West, 63-3, July, 411-16.
- (4) Yasuo Deguchi, Jay Garfield, and Graham Priest, Does a Table Have Buddha-Nature? A Moment of Yes and No. Answer! But not in Words or Signs! A Response to Mark Siderits, 2013, Philosophy East and West, 63-3, July, 387-98.
- (5) Yasuo Deguchi, with Jay Garfield, and Graham Priest, Two Plus One Equals One: A Response to Brook Ziporyn, 2013, Philosophy East and West, 63-3, July, 353-58.
- (6) Yasuo Deguchi, Jay Garfield, and Graham Priest, A Mountain by any Other Name: A Response to Koji Tanaka, 2013, Philosophy East and West, 63-3, July, 335-43.

[学会発表] (計 29件)

- (1) Yasuo Deguchi, Compartmentalized Trivialism: Nishida on Contradictory Self-identity, 2016. 3. 31, American Philosophical Association 2016 Pacific Division Meeting, APA Committee Session: What Can't Be Said: Paradox in Contradiction in East Asian Philosophy, The Westin St. Francis, San Francisco. USA.
- (2) Yasuo Deguchi, Analytic Asian Philosophy on Sanlun School,

2015. 8. 25, Srinakharinwirot University, Bangkok, Thailand.
- (3) Yasuo Deguchi, Analytic Asian Philosophy & Its Application to Nishida's Contradictory Self-identity, 2015. 5. 20, Department of Philosophy, Hildesheim University, Germany. Hildesheim, Germany
- (4) Yasuo Deguchi, Bhāviveka on Negation: from a Contemporary Viewpoint, 2015. 4. 21, The New Madhyamaka: Developing Ancient Indian Thought Through Contemporary Philosophical Tools and Techniques, Lady Margaret Hall, University of Oxford. Oxford, UK.
- (5) Yasuo Deguchi, Nishida's Contradictory Self-identity Reconstructed, 2015. 3. 6, Second Annual NUS-National Chenching University-Kyoto University Triangular Graduate Conference, National University of Singapore and Yale NUS collage. Singapore.
- (6) Yasuo Deguchi, Welcome to Analytic Asian Philosophy, 2014. 9. 26. Rabindra Bharati University, Kolkata. India.
- (7) Yasuo Deguchi, Welcome to Analytic Asian Philosophy, 2014. 9. 25. Jadavpur University, Kolkata. India
- (8) Yasuo Deguchi, Is Pseudo Jizang a Dialetheist? Contradictions in Sanlun School, 2014. 9. 20. 第四回日中哲学フォーラム, 日中の哲学者がともに考える-哲学の原理的あり方と現代社会における役割, 北京外国語大学. 北京、中国.
- (9) Yasuo Deguchi, Non-dialetheic Dialetheism, 2014. 8. 27. Paradox

Symposium. Yale-NUS Collage, Singapore.

- (10) Yasuo Deguchi, Is Pseudo Jizang a Dialetheist?: Contradictions in a Sanlun Text, 2014. 6. 29, The 2014 International Conference on Buddhist Thought: Language in the Tradition of Madhyamaka Thought, Huaan University, New Taipei. Taiwan.

[図書] (計 2 件)

- (1) Yasuo Deguchi, JeLoo Liu, and Douglas L. Barger eds., 共著, Nothingness in Asian Philosophy, Chap 20, Nishitani on Emptiness and Nothingness, pp.300-325, Routledge, London, 2014. 6.
- (2) Yasuo Deguchi, Jay Garfield, Graham Priest, and Koji Tanaka eds., 共編著, The Moon Points Back, Oxford University Press, New York, 2015. 7.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

出口 康夫 (DEGUCHI, Yasuo)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 20314073

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者